

みんなの思いを1つに集めることで個々の子どもは育つ

平成 25 年 9 月 理事長 片山喜章

9 月になって、暑さが、去ろうが残ろうが、暦は、容赦なく着実に運動会当日に向けて、進みます。運動会の練習は、既に猛暑の最中からスタートしています。その中で法人全体で確認している考え方があります。それは、運動会当日の子どもたちの姿が、たとえ、どんなにすばらしくても（それはそれで大事です！）、『子どもたちの意欲を引き出す保育者のかかわり方と全体活動の展開の仕方』『子ども主体で種目をつくるために子どもどうしがぶつかり合う経験』。この 2 点を練習過程における“大切な目標”として取り組んで、事後に保育としての評価をくださいます。各クラスの全体練習の取り組み方や個別のチュータリング、トラブルが生じた際の子どもどうしのかかわり合いや保育者集団の言葉かけや振る舞い方が問われるのです。具体的には、下記の 2 つのポイントが挙げられます。

1 つは、この業界では一般論として語られていませんが、一斉活動による練習をする前後の“話し合い”に重点を置くことの大切さです。それが子どもの主体性と意欲を促し、ほんとうの意味での育ちに結実すると見通しています。実際、活動＝練習時間が 10 分間、事後の話し合いが、20 分間という事はよくあることです。この話し合いも一方的な保育者の“誘導”だったり“説教”や“小言”であるなら逆効果です。子どもどうしの話し合いを傾聴し、個々が主役意識を持って自分たちでアイデアを出し合ったり抑制し合ったりする、この経験は、運動会の出来映えにもまして、個々の子どもの育ちにおいて、大きな意味を持つと考えます。ですから「バルーン」においては、何度もモデルビデオを見て覚えた後、自分たちの演技（練習）を録画して、それを再生して振り返りの話し合いをします。「組体操」は、練習も本番も、形は決まっていますが、役割やポジションは、その都度、その場で自分たちで瞬時に決めてやり切る内容になっています。なので、事後に話し合いをせざるを得ないのです。

もう 1 つは、『気合いタイム』です（あえて、この表現を使うことにしました）。

ある程度、“動きの流れ”が決まってからの練習は、担任以外の保育者（私も入ることがあります）が、できるだけ加わって、寄ってたかって声をだして、気合いを入れて指導し、大袈裟に激励し、賞賛を送ります。保育者たちの気合いのこもった姿は、子どもたちの意欲を促し、それは子どもどうしの関係にも順風を送り、個々の子どもの力発揮を促す、と見通します。そういう意味で『運動会行事は、子ども集団と保育者集団の双方が気持ちを寄せて、合わせて、本気モードになる』。まさに日本固有のすばらしい教育文化であると感じます。

そして、このような協力体験および協同活動を支えるのが、競技です。「クラス競技」や「リレー」、そこで「勝ち負け」「嬉しさと悔しさ」をチーム内で共有する経験が、逆に“協力の精神”を育てると考えます。保育の世界には「競技種目はやりすぎると飽きる」といい加減な事を言って、演技の練習に専念する実態があります。しかし、多様な競争を繰り返すことで、協調精神も相乗的に育まれる、それは、人間社会に共通するものである、と思います。